

インターネット, SNS 利用における, 情報モラル, 情報リテラシー, 情報セキュリティに関する文献検討 Literature Review on Information Ethics, Literacy, and Security when Using the Internet and SNS

諏訪美栄子, 春田佳代, 相撲佐希子, 中村美奈子,
村山友加里, 森下智美, 東山新太郎, 鈴木初子

(平成 31 年 1 月 31 日受理)

要 旨

研究目的: インターネット, Social Networking Service (以下 SNS) 利用時の情報モラル, 情報リテラシー, 情報セキュリティについて, フォーカス・グループ・インタビュー (以下 FGI) を用いて, 利用者の反応, 理解, 感情, 行動などを調査した研究を概観し, 情報モラルなどの研究の基礎資料とする.

研究方法: Google Scholar を用いて検索を行った. キーワードは「FGI」と「SNS 利用」「スマートフォン利用」「インターネット利用」「情報モラル」「情報セキュリティ」をそれぞれ期間指定せず and 検索し, 会議録や解説, 研究目的に沿わない文献を除き, 抽出した結果 6 編分析対象とした.

結果: FGI を用いた研究から, 日常的に利用されるインターネットや SNS の情報モラル, 情報リテラシー, 情報セキュリティについての一般的な知識や考え方, 行動などが明らかとなった. 情報モラル教育は, 地域や家庭でも教育が推進されているが, 学校が果たす役割は大きい. また, 人に迷惑をかけない行動が求められる. 情報リテラシーは, グローバル化に対応でき個々が安心して情報の発信や情報検索ができる技術が必要である. 情報セキュリティは, 実際に行う人の意見を取り入れ, 運用が可能なルールを考えることが重要である.

キーワード: インターネット, SNS, 情報モラル, 情報リテラシー, 情報セキュリティ

I 緒 言

総務省の平成 30 年版情報通信白書によると, スマートフォンの保有率は急速に増加し 20 代から 30 代は 90% 以上である. Social Networking Service (以下 SNS) はスマートフォンの普及とともに利用者が増えている¹⁾. 現在の若者は生まれながらに情報化社会で育っており, インターネットや SNS は日常生活の一部となっている. 平成 27 年 12 月から平成 28 年 3 月にかけて実施された情報活用能力調査²⁾によると, 高校生は基本的な情報モラルは理解し

ているが情報発信・伝達の際に, 他者の権利(肖像権や著作権)を踏まえ適切に対処することや, 不正請求のメールやサイトの対処に課題があると報告されている. 我々は 2016 年から看護学生の情報モラル, 情報リテラシーの現状を把握するために, SNS に焦点をあて, その知識や行動の実態を明らかにするため, 研究を行っている. その結果, SNS 利用に関する情報モラル(著作権, 肖像権, セキュリティなど)について知っているが, 講義資料を写真に撮り, LINE にアップする行動などから, 情報モラルなどの知識と実際の行動が乖離している可能性があり, 学生の規範行動育成の必要性が示唆さ

れた³⁾⁴⁾。しかし、なぜ、知識と行動が乖離しているのか明らかになっていないため、乖離している理由を明らかにする必要があると考えた。理解している状況を把握する方法として、井下訳らによると「フォーカス・グループ・インタビュー（以下 FGI）は、特定の話題について参加者の理解、感情、受け止め方、考え方を引き出すことがある」⁵⁾さらに「FGI は、人がどのように行動しているか、それはなぜかということの説明するのを助けるためにある」⁵⁾と述べており FGI を用いることが有効であると考えた。そこで、「インターネットや SNS 利用時の情報リテラシー、情報モラル、情報セキュリティ」について FGI を用いた研究の中で明らかになった実態（トラブル経験やそのときの率直な感情）に着目し、情報倫理の規範行動育成がどのように報告されているかを概観した。

II 用語の定義

- ・ SNS：社会的ネットワークをインターネット上で構築するサービス
- ・ 情報モラル⁶⁾：情報社会において適正な行動を行うためのもとになる考えと態度
- ・ 情報リテラシー⁷⁾：コンピュータやネットワークの基礎的な理解やコンピュータやソフトウェアの操作、情報検索能力等を指す
- ・ 情報セキュリティ：情報の機密性、完全性、可能性を確保すること

III 研究目的

情報モラルなどの知識と行動が乖離している理由を明らかにするため、インターネット、SNS 利用時の情報モラル・情報リテラシー・情報セキュリティについて、参加者の反応、理解、感情、行動などを引き出すことのできるフォーカス・グループ・インタビュー（以下 FGI）を用いて調査した研究を概観し、情報モラルなどに関する研究の基礎資料とする。

IV 研究の意義

情報モラルの知識と行動が乖離している理由を明らかにすることは、現代の若者のインターネットや SNS に関する問題行動の心理に迫ることに繋がり、若者の情報に関する危機を未然に防ぐことになる。そのため、インターネットや SNS 利用時の情報モラル、情報リテラシー、情報セキュリティに関するトラブル経験やそのときの率直な反応、感情、行動など把握することの意義は大きいと考える。

V 研究方法

対象となる文献の抽出

Google Scholar を用いて 2018 年 9 月 10 日に検索を行った。キーワードは「FGI」「SNS 利用」「スマートフォン利用」「インターネット利用」「情報モラル」「情報セキュリティ」をそれぞれ期間指定せず and 検索し、会議録や解説を除いて抽出した結果 136 編の文献が抽出された。その中から FGI の対象者が明記していない文献、FGI で得られた発言記載のない文献など研究目的に沿わない文献や、重複文献を除き 6 編を抽出し分析対象とした。

VI 結果

表 1 に文献の概要と分類（情報モラル、情報リテラシー、情報セキュリティ）を示した。情報モラルに関連する文献は 2 編、情報リテラシーに関連する文献は 2 編、情報セキュリティに関連する文献は 2 編であった。

1. 情報モラルに関連する文献

文献 1 は、青少年が安全にインターネット利用するための、保護者と家庭の状況に焦点をあてている。「プライバシー情報の露呈」および「有害情報の閲覧」は、保護者の規範意識や育児観、家族関係、家庭内ルール・対策と子供のネット利用リスクとの間に相関がみられた。「ネットでの出会い」のリスクは、家族関係と

表 1 文献の概要と分類 (情報モラル, 情報リテラシー, 情報セキュリティ)

分類	論文 No	掲載年 (筆頭者)	文献名	目的	対象	結果, 結論
情報モラル	1	2014 (千葉ら ⁸⁾)	青少年の安全なインターネット利用を実現する家庭の取り組みに関する考察	家庭における効果的な子供のネット利用とリスク対策のあり方を検討する。	子供がネット上の有害情報に接触することに対して「とても心配」「やや心配」と回答した人で、小学校 4 年生から高校 3 年生までの子供を持つ母親	・「プライバシー情報の露呈」および「有害情報の閲覧」は、保護者の規範意識や育児観、家族関係、家庭内ルール、対策と子供のネット利用リスクとの間に相関がある。 ・「ネットでの出会い」リスクは、家族関係と相関がある。 ・家庭内ルールと対策と、保護者のネットに対する考え方やリスク学習経験、家族間との間に相関がある。 ・子供の通学・学校を起点に保護者のネットワークを通じてアリテアラーのあるリスク情報を定期的に共有し、保護者の注意喚起することが有効。
	2	2018 (江口ら ⁹⁾)	一時的 UX を向上させた。ユーザが使いやすくなるような、歩きスマホ防止アプリケーション	User Experience に優れた。ユーザが使いやすくなるような、歩きスマホ防止アプリケーションを提供すること。	恒常的に歩きスマホをしている人	◆歩きスマホを行う理由：電車内でメールを作成している最中に駅に着いたときなど、歩きながらスマホでメール作成を続ける。移動時にゲームや動画を見ながら歩く。 ・リテラシーの低いグループは、知識不足による漠然とした不安を感じている。 ・リテラシーの高いグループは、自分の管理から外れた個人情報流出などに不安を感じている。 ・人に迷惑をかけることを不安と感じる。利便性が高いことを安心と感じる。 ・人間が意識的に感じているのは「安心」より「不安」である。 ・「不安」が無くなった場合に「安心」を感じる場合がある。 ・「安心」の認識は曖昧であり、その対極的な位置にある「不安」についての検討が必要。
	3	2009 (山本ら ¹⁰⁾)	インターネット利用の安心・不安調査と不安発症モデルの構築	安心に対する人々の認識を探る。インターネットや日常生活における安心や不安のケースを概観する。	・不安を感じやすく、リテラシーが低い人 ・不安を感じやすく、リテラシーが高い人 ・不安を感じにくく、リテラシーが低い人 ・不安を感じにくく、リテラシーが高い人 ・携帯電話をよく使う 18～21 歳の男女	◆子供の有害情報閲覧の責任の所在 ・親の責任ではない、サイトの問題 (中国、韓国)。 ・親の責任である (イギリス、ドイツ、フランス、フィンランド、アメリカ)。 ・親はネットのことがよく分かっていない (ドイツ、アメリカ、日本)。 ・サイトの管理者の責任だと思う (アメリカ)。 ◆ネットの事件が報道されたときの不安 ・自分のことでないから不安にならない (韓国)。 ・ネットの危険性を認識して使っているので、ニュースを聞いても不安にならない (ドイツ)。 ・自分と同じことが起こらないように気を付けている。不安にならない。勉強になる (フランス)。 ・日本では有害問題情報に関する報道を見聞した群が有害情報閲覧の不安が高い。
情報リテラシー	4	2013 (千葉ら ¹¹⁾)	インターネット上の有害情報に対する利用者意識の国際比較調査と考察	インターネット上の有害情報問題について一般利用者意識や実態から利用者視点で世界の状況と日本の特徴を浮き彫りにし日本の課題や今後の対策の在り方について考察する。	出身国: 米国、チリ、中国、韓国、シンガポール、英国、フィンランド、ドイツ、フランス、日本語会話が可能な、上記の国の国の出身者で、現在日本に住んでいる人 (在日歴が 3 年以内が望ましい)	◆管理者が情報セキュリティのルールを決めることで情報資産の認定と管理が実施されていると考えても、実際にはそのルールは運用が困難である。 ・情報セキュリティのルールを見ることができない。ルールの運用が困難。 ・トップダウンで決まる無意味なルール。難解なルール。いつの間にか作られるルール。 ◆従業員の見点を含まないリスクアセスメントがされている。 ・情報セキュリティに対する無意味なチェック。多様な業務に応じない。 ◆望ましい情報セキュリティ対策 ・管理者的なリスク議論。従業員からの意見収集の機能。何が何でも何が何でもできるかの管理者との議論。 ・具体的な事例の提示。業務を止めない対策。全社員への通知。
	5	2009 (沼田 ¹²⁾)	企業における内部者の故意による情報セキュリティインシデントへの対策に関する一考察	企業における内部者の故意の原因とした情報セキュリティインシデントへの対策と課題、その原因を考察する。	情報システムを利用する立場にある従業員を対象とした調査である。日常業務で PC を使用し、情報システムに対し何らかの不満を感じている従業員。	◆情報の持出行動を抑制できない理由 ・「情報を持出すのに必要な手続きを行うのに、時間的負担が大きい」「個人のリスクの認知が低い」「情報管理や持出行為について問い、合致せざるを認識していない」 ・ルールはしっかりしているが運用が面倒くさい。持出すために手間がかかる。 ◆外部への許可のない情報の持出理由 ・「仕事が終わらない」「早急に対応が必要」「プレッシャーに曝されるために組織外に無断で情報を持出行動を行う」 ・自分の人事評価を気にする人は、情報の持出行動を行う傾向がある。 ◆情報を持出したと思った理由 ・職員がいっぱいいるのに自分ひとりでいられないと思った。 ・過去に何らかの情報を持出してしまったことがある。 ・情報システムで監視しているがバレないときがある。 ・誰も見ていないところであった。一応建前上悪いかなというのがあるのでみんなが帰った後でやった。 ◆罰則について ・正規の手続きに即しても事故が起きた場合罰則は厳しい。
情報セキュリティ	6	2017 (岡野ら ¹³⁾)	セキュリティルール違反行動の抑制に関する一考察	セキュリティルール違反行動のうちの「情報の持出行動」に焦点をあて、情報を持出す行動の状況や、当事者の心理に着目し、情報持出行動の要因を明らかにし、その抑止策について考察する。	・1 都 3 県に在住の 20 代～50 代の男女 ・有職者で持出行動経験者 ・勤務先で情報持出行為禁止のセキュリティルールがある人 ・過去に情報持出行為禁止のルールに違反した経験がある人	

相関がみられた。さらに「家庭内ルールや対策」と、保護者のネットに対する考え方やリスク学習経験、家族関係との間に相関がみられた。これらの結果から、子供の通う学校を起点に保護者のネットワークを通じてリアリティーのあるリスク情報を定期的に共有し、保護者に注意喚起することの有効性を述べている。

文献2は、スマートフォンの「歩きながら行動」（以下、歩きスマホ）が危険・迷惑であると社会問題になっており「歩きスマホ防止」の利用傾向度を高めるアプリケーション開発のため、歩きスマホの実態把握調査を行った。その結果、歩きスマホで利用しているコンテンツはLINEとゲーム、地図、動画（YouTube）などであった。歩きスマホを行う理由は、電車内などでメールを作成している最中に駅に着いたとき、そのまま歩きながらスマホでメールを作成する。徒歩で移動する間、スマホでゲームや動画を見るなどの現状が分かった。

2. 情報リテラシーに関連する文献

文献3は、インターネットを快適に活用できるための「安心」はどのように得られるのか調査していた。リテラシーの低いグループは、知識不足による漠然とした不安を感じている。リテラシーの高いグループは、自分の管理から外れた個人情報の流出などに不安を感じていることが分かった。これらのことから人間が意識的に感じているのは「安心」より「不安」である。「安心」の認識は曖昧であり、その対極的な位置にある「不安」についての検討が必要であると述べている。

文献4は、簡単に閲覧できるインターネット上の有害情報問題について、一般利用者の意識や実態から利用者の視点で、9ヶ国の状況を調査し日本と比較していた。その結果、子供の有害情報閲覧の責任の所在は、親の責任ではなくサイトの問題（中国、韓国）、親の責任である（イギリス、ドイツ、フランス、フィンランド、アメリカ）、親はネットのことがよく分かっていない（ドイツ、アメリカ、日本）、サイ

トの管理者の責任だと思う（アメリカ）など国によって異なった認識をしていることが明らかになった。また、ネットの事件が報道されたときの不安については、自分のことでないから不安にならない（韓国）、ネットの危険性を認識して使っているので、ニュースを聞いても不安にならない（ドイツ）、自分に同じことが起こらないように気を付けている（フランス）と発言している。日本では、有害情報問題に関する報道を見聞きした群が有害情報閲覧の不安が高い。リテラシーの問題点は「親が子供にネットの適切な使い方を教えていない」ことである。これらの結果から他国と情報共有しながら、リテラシー教育の開発が必要と述べている。

3. 情報セキュリティに関連する文献

文献5は、企業では故意によって内部で起こる情報漏洩などの情報インシデントに対し、対策を講じているが発生件数が減らないため現状を調査されていた。その結果、管理者の視点でリスクアセスメントが行われ、従業員の視点が含まれないため、実際はルールの運用が困難であり適切な管理ができていなかった。望ましい情報セキュリティ対策として、ルール周知において従業員が理解しやすい事例を用いた研修や試験、リスクアセスメントに従業員の意見を採りあげて欲しいという要望が挙げられていた。

文献6は、組織における情報漏洩は内部に起因するものが多く、許可のない情報の持出行動について調査されたものである。結果、所属組織の「ルールはしっかりしているが運用が面倒くさい」「情報を持出すために手間がかかる」「仕事が終わらない」「早急に対応が必要」など企業の就業規定等のプレッシャーに曝されるために情報の持出行動を行う。自分の人事評価を気にする人ほど情報の持出行動を行う傾向がみられた。また、情報の持出しができたと思った理由として「職員がいっぱいいるのに自分ひとりくらいバレないと思った」「過去に何度か持出していたがバレなかった」「誰も見ていないところでやった」など具体的な状況が明らか

になった。結論としてセキュリティに関する知識を持っても持出行動抑止に働くとはいい難い。持出し・残業の手続きの負担を減らすことが持出行動抑止に有効に働くと述べている。

VII. 考 察

1. 情報モラルについて

情報社会が進展するに伴い一般家庭にも端末が普及し、老若男女を問わず個人の携帯端末からインターネットに接続することで、情報収集や発信が瞬時に可能となり日常生活は便利になった。その反面、個人情報流出、インターネットにおける匿名性を利用した誹謗中傷やいじめ、犯罪、有害情報など多くの問題が発生している。文部科学省は教育の情報化に関する手引¹⁴⁾の中で、学校だけでなく、地域や家庭でも情報モラルの教育は推進されている。また、現在の子供（青少年）の保護者が育ってきた年代（1990年頃）には、スマートフォンのような端末携帯はなく情報を受け取ることがほとんどで、発信することは少なく、情報モラルの教育を受けた人は少ないと推測される。文献1からも「プライバシーの露呈」「有害情報閲覧」などは保護者の情報規範意識や家庭環境が影響していると述べており個々で差があると考える。情報モラルに関して、ある一定のレベルの教育が継続的に行われる必要がある。また、今後ますます情報化が進展することを考えると、情報に関する研修や教育機関である学校が果たす役割は大きいと考える。情報モラル行動においても人に迷惑をかけない行動が求められる。しかし、歩きスマホを行う人の中には、よくないと理解しつつ行動する人や、危険や迷惑をかけないように意識している人などさまざまであると推測する。文献2では、人の行動変容は非常に困難であるため、歩きスマホをすることを前提に危険を回避することが重要と述べている。歩きスマホはよく見かけるが、止めさせるように働きかけることは重要だが、止められない現状を理解し回避策を考えることも重要であると

考える。

2. 情報リテラシーについて

近年、LINE や Instagram を筆頭に、Twitter、Facebook、動画（YouTube）などの SNS の発展が早く、誰でも簡単に SNS を使うことができる。また、簡単に身近な出来事や自分の考えを配信でき、瞬く間に全世界に広がる。さらにネットショッピングやネットバンクなど、金銭に係わることもネットで簡単にできるような時代である。しかし、これらを適切に活用するためには、相応の知識と技術が必要である。このような状況から情報リテラシーの中でも特に情報の発信、情報検索に焦点をあてたりテラシーが問題であると考え。文献3で、知識不足による漠然とした不安を感じている場合、その不安が安易なインターネット活用の抑止力として働く可能性が考えられるが、利便性が高いことを安心と感じる人は、トラブルに巻き込まれる可能性が高いと推測できる。

インターネットは、国内外に係わらず瞬時に情報の配信、受信ができるため、組織や企業に限らず、個人レベルにおいても情報のグローバル化が進んでいる。文献4では、外国籍を有する人々の文化や社会背景などにより、有害情報閲覧時の責任の所在に認識の違いがあることが分かった。また、「親はネットのことが分かっていない」という意見が聞かれている。日本でも「親が子供にネットの適切な使い方を教えていない」ことが問題になっている。そのため、諸外国と情報共有しながら、情報リテラシー教育の開発が必要と述べている。今後は、さらに情報のグローバル化が進展することを考え、諸外国との文化の違いや社会背景が、インターネット利用時のトラブルにならないような情報リテラシー教育が必要であると考え。

3. 情報セキュリティについて

企業において情報漏洩などの防止のため、セキュリティ行動は必須である。NPO 日本ネットワークセキュリティ協会の報告¹⁵⁾によると、2017年にインターネット上に報告されたセキ

セキュリティインシデントは386件で、誤操作、情報の紛失・置忘れ、不正アクセスや管理ミス、不正な情報持出しなどである。文献5では、不正な情報持出しに関するセキュリティに、不満を持つ人を対象に調査を行った。その結果「管理者が情報セキュリティのルールを決めているが実際はそのルールは運用が困難である」「従業員の視点を含まないリスクアセスメントがされている」と従業員は述べている。諏訪らは¹⁶⁾『情報セキュリティ行動モデルの構築に影響する要因として貢献感と無効感が抽出され、ユーザーは情報セキュリティ対策に対する重要性は認識しており、自分は何らかの貢献ができると考えている』と述べている。このことから、従業員の意見を取り入れ情報セキュリティのルールを考えることで会社に貢献することができ、セキュリティルールの遵守に繋がるのではないかと考える。竹村ら¹⁷⁾は情報漏洩に繋がる行動に影響を与えている要因として、不正容認風土が最も大きな直接因子で、次いで従業員満足を挙げている。情報の持出しについては「職場で仕事する気が起きなくて、休日にスタバとかで仕事するほうがはかどるので、仕事を切り上げたかった」「休日だったが持出さないと仕事が終わらなかった」「終電までに仕事が終わらなかった」といった、情報を持出してまで仕事を行わなければならない不正容認風土があるのではないかと考える。これらは従業員満足度の低下、労働意欲の低下や離職など、情報セキュリティの問題以外にまで及ぶ可能性があり、改善が必要であると考えられる。

V 結 論

FGIを用いた研究から、インターネットやSNS利用時の情報モラル、情報リテラシー、情報セキュリティについて、日常に使われる一般的な知識や考え方、行動などが明らかとなった。情報モラル教育では、情報に関する研修や教育機関である学校が果たす役割は大きい。情報モラル行動においても人に迷惑をかけない行

動が求められる。情報リテラシーでは、発展する情報化に相応した情報の発信、情報検索やグローバル化に対応できるリテラシー教育が必要である。情報セキュリティでは、実践する人の意見を取り入れ、運用が可能なルールを考えることが重要である。

VI 研究の限界と課題

今回は、国内の文献のみで、FGIを使用した文献を使用した。そのため、海外の文献やFGI以外の文献を検討していないことが限界である。

本研究は、JSPS 科研費 JP18K10173 の助成を受けたものである。

引用・参考文献

- 1) 総務省：平成30年版情報通信白書，<http://www.soumu.go.jp/>（2018.9.18）。
- 2) 文部科学省：情報活用能力調査（高等学校）調査結果，<http://www.mext.go.>（2018.9.18）。
- 3) 相撲佐希子，春田佳代，諏訪美栄子，他：看護学生の情報リテラシーにおける情報倫理の現状（第1報）—SNSに対する情報倫理の知識と規範的行動— 修文大学紀要，8：99-110，2016。
- 4) 相撲佐希子，春田佳代，諏訪美栄子，他：看護学生の情報モラル教育の実践と評価（第2報）—SNSに関する知識と規範的行動— 修文大学紀要，9：17-24，2017。
- 5) S・ヴォーン，J・S・シューム，J・シナグブ著／井下理監訳，田部井潤訳，芝原宣幸訳：グループ・インタビューの技法初版，P7-9，慶応義塾大学出版会株式会社，2016。
- 6) 国立教育政策研究所：情報モラル教育実践ガイドンス，http://www.nier.go.jp/kaihatsu/jouhou_moral/index.html（2018.12.13）。
- 7) 文部科学省：学術情報基盤実態調査（旧大学図書館実態調査）—用語の解説，<http://www.mext.go.jp/>（2018.12.13）。
- 8) 千葉直子，関良明，堀川祐介，他：青少年の安全なインターネット利用を実現する家庭の取り

- 組みに関する考察，情報処理学会論文誌，55（1）：311-324，2013.
- 9) 江口真人，三好匠，新津善弘，他：一時的 UX を向上させ利用意向度を高める歩きスマホ防止アプリケーション，ヒューマンインタフェース学会論文誌，20（2）：243-254，2018.
- 10) 山本太郎，千葉直子，間形文彦，他：インターネット利用の安心・不安調査と不安発．生モデルの構築．日本社会情報学会全国大会研究発表論文集，54-59，2009.
- 11) 千葉直子，山本太郎，関良明，他：インターネット上の有害情報に対する利用者意識の国際比較調査と考察．情報処理学会論文誌，54（4）：1619-1631，2013.
- 12) 沼田晋作，柴田賢介，岡崎聖人，他：企業における内部者の故意による情報セキュリティインシデントへの対策に関する一考察，コンピュータセキュリティシンポジウム 2009（CSS 2009）論文集，2009：1-6，2011.
- 13) 岡野裕樹，奥山浩伸：セキュリティルール違反行動の抑制に関する一考察，情報処理学会論文誌，58（1）：258-268，2017.
- 14) 文部科学省：「教育の情報化に関する手引」，<http://www.mext.go.jp/>（2018.12.13）.
- 15) NPO 日本ネットワークセキュリティ協会：2017 年情報セキュリティインシデントに関する調査報告書【速報版】，<https://www.jnsa.org/result/incident/>（2018.12.13）.
- 16) 諏訪博彦，原賢，関良明：情報セキュリティ行動モデルの構築，人はなぜセキュリティ行動をしないのか，情報処理学会論文誌，53（9）：2204-2212，2012.
- 17) 竹村敏彦，三次祐輔，花村憲一：情報漏えいに繋がる行動に関する実証分析，情報処理学会論文誌，56（12）：2191-2199，2015.

Literature Review on Information Ethics, Literacy, and Security when Using the Internet and SNS

Mieko Suwa, Kayo Haruta, Sakiko Sumai, Minako Nakamura, Yukari Murayama, Tomomi Morisita, Sintaro Higashiyama, Hatsuko Suzumura

Abstract

Research Objectives : We provide an overview of research concerning information ethics, literacy, and security while using the Internet and SNS. We used focus group interviews (FGI) to survey users' reactions, understandings, emotions, and behaviors, and to provide fundamental data for information ethics research.

Research Methods : Six research compilations using FGI were studied, sourced using Google Scholar.

Results : Everyday knowledge and thinking about information ethics when using the Internet and SNS was revealed. The need for education on information ethics, literacy, and security, as well as the technologies and operational rules that can be used to adapt to globalization, is highlighted.

Faculty of Nursing, Shubun University
6 Nikko-cho, Ichinomiya, Aichi 491-0938, Japan

Key words : Internet, Social Networking Services, information ethics, information literacy, information security